加藤老师来开讲!

点击收听

新年第一笔

日本人过公历年，每年 1 月 1 日便开始庆祝正月，悠然地欢度新年假期。从 1 月 2 日起，新年第一梦（初夢）、新年第一售（初売り）、新年第一批出货（初荷）、新年第一次排练（初稽古）、新年第一场戏（初芝居）等等，新年的各种第一次活动便开始了。中国人常说“有始有终”，日本人则说“好始好终（始めよければ終りよし）”。日本人相信，只要新年开一个好头，那么这一年就会诸事顺遂。

每到 1 月 2 日，一些日本人还会写下新年的第一个毛笔字，叫做“新年第一笔（書き初め）”。现代人平时大多使用圆珠笔和钢笔，不过写“新年第一笔”时，必须使用砚台、墨水、毛笔和传统的纸张，写下的字也多为新年的祈愿或祝福。过去的日本人希望借此讨一个吉利，如果“新年第一笔”写得漂漂亮亮，那么之后的字也会写得端正美丽，预示这一年一帆风顺。

“新年第一笔”这项习俗有着一千多年的历史。在距今大约 1200 年前的平安时代，京都的宫廷流传着一种名为“吉书之奏（吉書の奏）”的传统。每逢新年伊始或改元换代等重要历史节点，臣子们会上奏天皇，表达喜庆和祝贺。

后来，镰仓幕府和室町幕府等武家政权也继承了这种传统，“吉书之奏”渐渐演变成一种新年习俗，叫做“吉书第一笔（吉書始め）”。

到了 17 世纪，进入江户时代后，国泰民安，百姓生活逐渐变得宽裕。所以，早在大约 400 年前，日本老百姓的识字率就开始上升。平民也模仿贵族和上级武士，在年初书写“吉书第一笔”。于是，这项传统就这样在日本民间扎下了根，成为了现在的“新年第一笔”。

无论是过去还是现在，多数日本人都会在自己家里书写“新年第一笔”。而且，在江户时代，这一习俗比现代更富有仪式感。

第一步，要汲取新年的第一桶井水。这桶水在日语中叫做“わかみず”，汉字写作“若水”，人们会把这水供在自家的神龛前。

第二步，就是用“若水”和砚台研墨。然后，朝着当年据认为最吉利的方位，也就是“惠方”正襟跪坐，摒除杂念，用毛笔在纸上写下一首汉诗或和歌。这就是古代成年人的“新年第一笔”。

日本还有小孩子的“新年第一笔”，一样古已有之。江户时代后期，日本民间涌现出了许多“寺子屋”，也就是教普通人家的孩子读书习字的小规模私塾。百姓家的孩子上寺子屋学习汉字，也会在寺子屋书写“新年第一笔”。

“新年第一笔”写完后，日本人会将其贴在家中，一直贴到 1 月 15 日小正月为止。在小正月这天，日本人会在郊外或神社的空地等处生一堆火，把“新年第一笔”和正月装饰一起烧掉。传统说法认为，“新年第一笔”的纸在火中升得越高，之后写的字就越漂亮。

时光飞逝，到了 21 世纪的今天，时代变了，书写“新年第一笔”的成年人也变少了。

不过，日本的中小学生依然保留着这项传统，他们的寒假作业之一就是书写“新年第一笔”。虽然书写的时间比过去自由，可以不定在 1 月 2 日，但不管怎么说，正月前后孩子们必须在自家拿起毛笔“挥毫泼墨”。

书写的内容各式各样。低年级的孩子会拿到学校发放的“字帖”，照着写就行。高年级的孩子可以自由选择喜爱的词句。日本的中小学生写“新年第一笔”时，最受欢迎的汉字词组有：“夢”、“新年”、“迎春”、“一期一会”等。也有些孩子会写汉字和假名混拼的词组，比如：“初日の出（第一次日出）”和“春の風（春风）”。

1 月学校开学后，孩子们做寒假作业时写的“新年第一笔”会一齐贴在学校的走廊上展示。有些平时表现并不抢眼的孩子因为字写得好，这时会被同学们刮目相看，大家都会惊讶地称赞：“没想到你的字竟然写得这么好？！”

日本有句老话，叫“字如其人（字は人を表す）”。对生活在现代的孩子们来说，用毛笔写字或许有点麻烦，不过毛笔字确实能反映一个人的个性。

我记得我小学时也曾在做寒假作业时写过“新年第一笔”。虽然已经记不起写了什么字，不过正月在自家磨墨时墨水的味道，金属镇纸冰冷的触感，还有墨水沾在手指上，用水龙头的冷水冲却怎么也冲不掉的情景，一直都还记在脑海中。

各位听友，您想不想试试书写一下“新年第一笔”呢？欢迎大家把您写下的“新年第一笔”拍成照片发给我们。期待您的分享！

《加藤老师来开讲！》是 NHK 日本国际传媒中文广播节目《波短情长》中的小栏目，特邀日本明治大学教授加藤彻深入浅出、诙谐幽默地讲解日本文化。您有没有想要了解的日本文化或习俗？欢迎给本节目来信或留言！

加藤先生の開講コーナー!

中国語音声はこちら

書き初め

日本人は毎年一月一日に正月を祝い、のんびりと過ごします。一月二日から初夢、初売り、初荷、初稽古、初芝居、というように、新年第１回のいろいろな活動が始まります。「始めよければ終りよし」というとおり、新年のスタートにうまくゆけば、年末まで万事がうまくゆく、という考えかたが日本にはあります。

新年で最初に毛筆で文字を書く「書き初め」も一月二日に行います。現代人はふだん、ボールペンや万年筆で字を書きますが、書き初めのときは、硯と墨と毛筆を使って、伝統的な紙に、正月にふさわしい言葉を書きます。

「書き初め」で上手な字を書けたら、その後も綺麗な文字が書けるようになり、万事うまくゆく、と昔の日本人は験を担いだのです。

書き初めの歴史は千年以上あります。今からおよそ千二百年前の平安時代、京都の宮廷では、「吉書の奏」という行事がありました。これは、年始や改元など時代の節目に、臣下が吉祥のお祝いの気持ちをこめて天皇への上奏文を書く、という行事でした。「吉書の奏」は、後の鎌倉幕府や室町幕府などの武家政権にも受け継がれ、「吉書始め」という新年の儀礼行事になりました。

17 世紀、江戸時代が始まると、平和が続き、庶民の生活にも余裕が出てきました。こうして４百年くらい前から、日本の庶民の識字率は上昇しました。貴族や上級武士の年初の儀礼だった「吉書始め」の習慣を、庶民もまねるようになりました。こうして、現代につながる「書き初め」の習慣が民間に根をおろしました。

書き初めは、今も昔も自宅で行うことが多いです。

江戸時代の書き初めは、今よりも儀式的でした。

まず、新年の最初に井戸で水を汲みます。これを「若水」(わかみず)と呼びます。この若水を、自宅の神棚の前にお供えします。その後、若水を硯にいれて墨をすります。そして、その年で縁起が良いとされる方角、いわゆる「恵方」に向かって正座し、心を澄ませて、漢詩や和歌を毛筆で紙に書きました。これは、昔の大人の書き初めです。

子どもの書き初めも、昔からありました。

江戸時代の後半、庶民のための小規模な私塾である「寺子屋」が民間に普及しました。庶民の子どもは寺子屋に通い、漢字の読み書きを習いました。寺子屋でも、書き初めが行われました。

書き初めで書いた紙は、一月十五日の小正月まで、室内に貼りました。小正月の日には、郊外の空き地や神社の境内などで、正月の飾り物といっしょに書き初めも燃やしました。書き初めの紙が炎で高く舞い上がると文字が上達する、という迷信もありました。

時は流れて 21 世紀の今日、時代の変化によって、書き初めを行う大人は少なくなりました。

一方、日本の小中学生は、冬休みの宿題として、今も自宅で書き初めをさせられます。必ずしも一月二日でなくてもよいのですが、ともあれ、正月の前後に自宅で毛筆を手に取ります。書く文字の内容はさまざまです。低学年では学校から「お手本」をわたされ、それをまねして書くように言われます。高学年では、自分で好きな言葉を選んで書く、という宿題が多いです。小中学生の書き初めで人気のある漢字は「夢」「新年」「迎春」「一期一会」などです。漢字とひらがなを混ぜて「初日の出」「春の風」などのように書く児童もいます。

こうして冬休みの宿題で書いた書き初めは、一月の授業開始後、廊下に一斉に貼られます。ふだん目立たなかった子が、まわりから「えっ、こんなに立派な字を書くの!?」と、見直されることもあります。

日本には「字は人を表す」という言葉があります。毛筆で紙に文字を書くのは、現代の子どもにとってはめんどくさいですが、毛筆で紙に書いた文字は、たしかに個性的になります。

私も小学校の冬休みの宿題で、書き初めをした記憶があります。どんな言葉を紙に書いたのかは、忘れてしまいました。でも、正月の自宅で墨をすったときの墨のにおいとか、金属の文鎮の冷たい手ざわりとか、手の指についてしまった墨を冷たい水道水で洗い流そうとしてもなかなか落ちなかったことなどは、覚えています。

リスナーの皆様も、書き初めをなさってみてはいかがでしょうか。もし書き初めをしたら、その写真をコメントとともに、番組に送ってくださいね。お待ちしております。

「加藤先生の開講コーナー！」は NHK 国際放送のラジオ番組『波短情長』のコーナーです。明治大学の加藤徹教授が、日本の文化について楽しく解説します。あなたの知りたい日本の文化や風習は何ですか？メッセージもお待ちしています。